

実践報告

本学におけるアンチ・ドーピング教育について

The report of anti-doping education at Musashigaoka college

高橋 琴美 田本 育代 島田 里緒菜
Kotomi Takahashi Ikuyo Tamoto Riona Shimada

Abstract

本報告では、アンチ・ドーピング教育を行っている「スポーツ医学実習」及び「スポーツ医学」の授業時にアンケートを実施し、アンチ・ドーピングについての理解が得られたかどうか、得られた知識が定着しているかどうかを確認するとともに、本学授業におけるアンチ・ドーピング教育の課題について検討及び報告する。2017年（平成29年度）から2021年（令和3年）入学生でスポーツ医学実習の履修者である1年生400名（健康栄養専攻139名、健康スポーツ専攻247名、健康マネジメント専攻14名）、及びスポーツ医学履修者である2年生264名（健康栄養専攻90名、健康スポーツ専攻162名、健康マネジメント専攻11名、無回答1名）を対象とし、アンチ・ドーピングに関する授業の前後にアンケートを実施し、無記名、自由記述で回答させた。その結果、アンチ・ドーピングに関する授業への理解度は非常に高く、ドーピングをただ否定するのではなく、その理由についても理解できていた。また、「ドーピング」や「ドーピング検査」へのイメージは、1年授業後ではドーピング検査は大変で厳しい検査ではあるが、選手自身を守るための検査であり、選手の潔白を証明する検査であることを理解していることが推察されたが、2年時に調査すると1年授業後に回答が増えた項目は回答数が減少しており、1年授業前とほぼ同じ結果を示した。このことから、授業で理解した知識の定着が不十分であることが示され、今後は正しい知識を定着させるためにも、継続的にアンチ・ドーピング教育を実施していくことが必要であると考えられた。

キーワード： アンチ・ドーピング教育、理解度、定着

I はじめに

ドーピングとは、一般的に競技能力を向上させることを目的として、薬物、方法などを不正に使用することであり¹⁾、スポーツでは厳しく禁止されている。また承認された場合を除き、治療目的で薬を使用し、競技力向上の意図がなかったとしても、アスリートから採取した検体（尿、血液）から禁止物質が検出されると、アンチ・ドーピング規則違反とみなされ、制裁が課される¹⁾。このようなドーピングを防止する活動の目標は、スポーツ固有の価値を保全することであり、具体的な活動としては（1）関係者への教育・啓発および情報提供の実施、（2）禁止物質の流通制限、（3）ドーピング検査、の3つよりなっている²⁾。本学でもさまざまな授業でアンチ・ドーピングの内容を授業に取り入れているが、前回の報告では「スポーツ医学実習」でのアンチ・ドーピング教育・啓発の取り組みについてアンケート調査を実施し、授業後はアンチ・ドーピングに対する理解度が非常に高く、ドーピングをただ否定するのではなく、その理由についても理解で

きていたことが示された。またいかに継続してアンチ・ドーピング教育を行うかを検討し、実践していくことが必要であると考えられた⁴⁾。そこで本報告では、1年後学期の「スポーツ医学実習」の授業の前後、及び2年前学期の「スポーツ医学」でアンケートを実施し、アンチ・ドーピングについて理解が得られたか、その知識が定着しているかを調査するとともに、本学授業におけるアンチ・ドーピング教育の課題について報告する。

II 方法

1. 対象

2017年（平成29年度）から2021年（令和3年）入学生でスポーツ医学実習の履修者のうちアンケートに回答した1年生400名（健康栄養専攻139名、健康スポーツ専攻247名、健康マネジメント専攻14名）、及びスポーツ医学履修者のうちアンケートに回答した2年生264名（健康栄養専攻90名、健康スポーツ専攻162名、健康マネジメント専攻11名、無回

答1名)を対象とした。

2. 方法

「スポーツ医学実習」履修者に対しては、1年後学期12月(2017、2018年入学の健康栄養専攻については2月)のアンチ・ドーピングに関する授業の前後に、「スポーツ医学」履修者に対しては2年前学期7月のアンチ・ドーピングに関する授業の前にアンケートを実施し、無記名で回答させた。2017年～2019年はアンケート用紙への記入としたが、2020、2021年はコロナ禍によりスポーツ医学の授業を遠隔授業で実施していたため、Google フォームを利用し、アンケートを実施した。

3. アンケート内容

授業前のアンケートについては、以下の1)～4)の設問について回答させた。設問3)については、前回の報告で回答数が多かった項目を選択肢とした。

1) 将来、どのようにスポーツに関わっていきたいと考えていますか。選手、指導者、サポートスタッフの中から当てはまるものを選んでください。(複数回答可)

2) これまで「ドーピング」について話を聞いたことはありますか。

3) 「ドーピング」のイメージに当てはまるものを以下の中から選んでください(複数回答可)。

- (1)パフォーマンスが上がる(記録が伸びる)
- (2)100%以上の力が出る
- (3)筋力がアップする
- (4)やる気が出る
- (5)疲れが残らない
- (6)有名になれる
- (7)薬を使う
- (8)ずるい
- (9)違反
- (10)体に悪い(副作用がある)
- (11)試合に出られない
- (12)記録が取り消される
- (13)その他(自由記述)

4) 「ドーピング検査」のイメージを教えてください。また、授業後のアンケートでは、上記の設問1)2)の代わりに授業内容への理解度を5段階で記入させ、

上記設問3)については自由記述で記入させた。

4. 授業内容

日本アンチ・ドーピング機構作成の資料³⁾を参考に以下の内容を解説した。

- 1) ドーピングとは何か
- 2) ドーピングの歴史
- 3) アンチ・ドーピング活動の歴史
- 4) 世界アンチ・ドーピング機構設立と日本アンチ・ドーピング機構の設立
- 5) 禁止されている理由
- 6) 規則違反と実際の規則違反例
- 7) アスリートの役割と責務
- 8) ドーピング検査とその手順

また、2019年からは日本アンチ・ドーピング機構作成の新たな資料を使用し、これまでの内容の他に以下内容を加えながら説明した。

- (1)アンチ・ドーピングの目的とルール
- (2)スポーツの価値とは
- (3)世界アンチ・ドーピング規定
- (4)日頃から注意すること

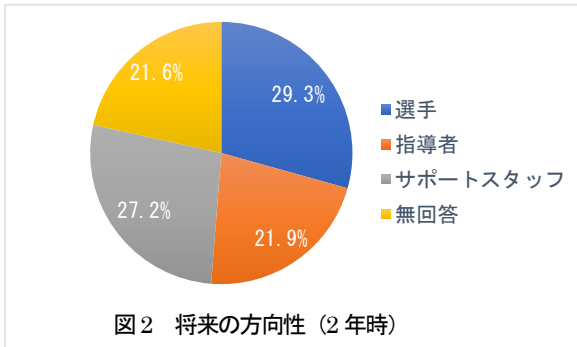
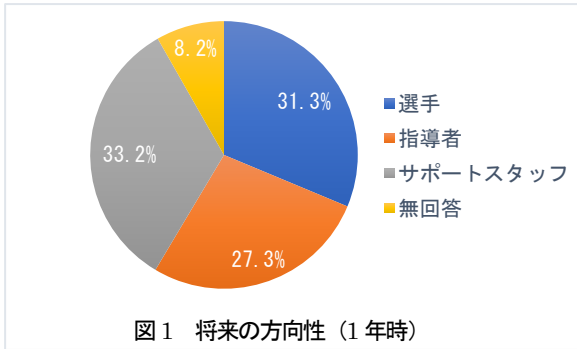
一方的な説明にならないように、アンチ・ドーピングに関する問題を出し、検査手順についてはDVDを用いて説明をした。配付資料については、2018年入学生までは授業で使用した内容と同じものを、2019年からは日本アンチ・ドーピング機構作成のFAIR PRIDEガイド⁵⁾を資料として配付した。

III 結果及び考察

1. アンケート結果

1) 将来の方向性(スポーツとの関わり方)

1年時では、選手148名(31.3%)、指導者129名(27.3%)、サポートスタッフ157名(33.2%)、2年時では選手83名(29.3%)、指導者62名(21.9%)、サポートスタッフ77名(27.2%)との回答だった(図1.2)。1年時では全体の91.8%、2年時では78.4%の学生が、選手、指導者、サポートスタッフとしてスポーツに関わることを希望していた。どちらの科目のスポーツ指導に関わる資格やスポーツ栄養士などの資格必修となっている科目であり、将来の方向性として何らかの形でスポーツに関わることを希望している学生が多かったと考えられた。



2) アンチ・ドーピング教育の有無

1年時では「ドーピング」について話を聞いたことがあると回答したのは257名(64.4%)、2年時では238名(90.2%)であった。2年時は1年時にスポーツ医学実習や他の科目、テレビ等のニュースなどで「ドーピング」に関する情報に触れていることが考えられた。

3) アンチ・ドーピングの授業内容への理解度

「よく分からなかった」を1、「とても理解した」を5とし、5段階で評価したところ、4または5の回答が91.3%であり、多くの学生が授業内容を理解していると考えられた。

4) 「ドーピング」のイメージについて

授業前では、1、2年時とも「パフォーマンスが上がる(記録が伸びる)」「薬を使う」「違反」「試合に出られない」「記録が取り消される」の回答が多かった(表1)。

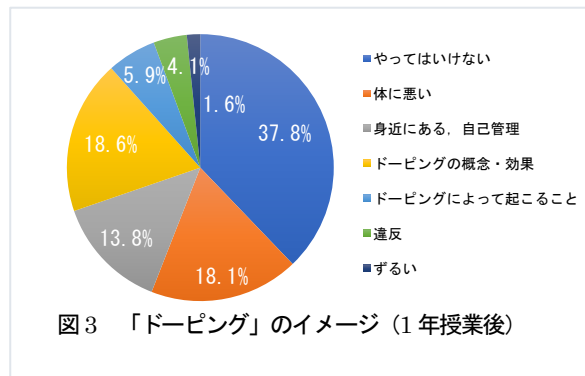
授業後は自由記述の回答を7項目に分類して集計したところ、ドーピングを否定する「やってはいけない」との回答が最も多く、次いで「ドーピングの内容、効果」「体に悪い」が多く、授業前の回答とほぼ同じ回答内容だった(図3)。しかし授業後の回答では、「禁止物質は身近にあるため自己管理が必要」との回答が見られた。このことから授業によってドーピングを否

定するだけでなく、ドーピングが禁止される理由やアスリートの役割と責務などについてしっかり理解していると考えられた。

表1 「ドーピング」のイメージ (授業前)

	1年	2年
1. パフォーマンスが上がる (記録が伸びる)	183	301
2. 100%以上の力が出る	87	129
3. 筋力がアップする	135	197
4. やる気が出る	68	67
5. 疲れが残らない	47	46
6. 有名になれる	23	22
7. 薬を使う	179	270
8. ずるい	127	178
9. 違反	207	300
10. 体に悪い (副作用がある)	124	119
11. 試合に出られない	162	244
12. 記録が取り消される	190	236
13. その他	5	11
回答数合計	1,537	2,120

(回答数、複数回答可)



5) 「ドーピング検査」のイメージ

自由記述の回答を検査内容(尿検査、血液検査など)、検査方法(抜き打ちで実施、検査室で検査員に監視されるなど)、検査実施の印象(厳しく検査される、ルールが細かいなど)、検査の目的・意味(フェアにスポーツをするため、選手の潔白を証明するためなど)、その他の5項目に分類し集計したところ、1年時授業前、2年時授業前では「検査内容」についての回答が多く、1年時授業後では「検査実施の印象」、「検査の目的・意味」についての回答が多かった。検査内容のイメージは時間を経過しても残っているが、授業後には理解

していた検査実施の印象」、「検査の目的・意味」については、半年で薄れていた。

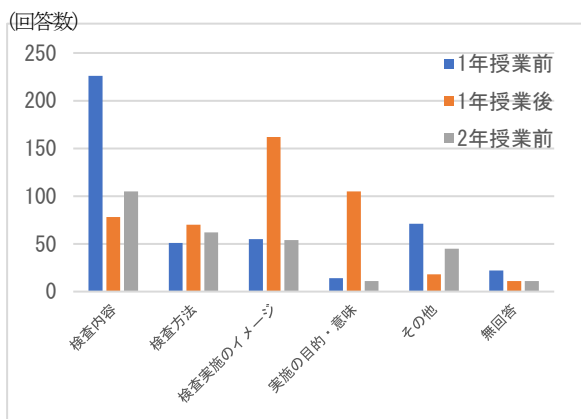


図4 「ドーピング検査」のイメージ

IV 今後の課題

本学でアンチ・ドーピング教育を行っている「スポーツ医学実習」及び「スポーツ医学」は、日本スポーツ協会公認指導者共通科目に該当する科目であり、選手として活動している学生から、指導者を目指す学生、アスレティックトレーナーや栄養士として選手をサポートすることを旨とする学生まで、履修者の幅広く履修している。これまで同様に、単に同じ内容、同じ説明をするのではなく、選手の視点、指導者の視点、栄養士の視点で話をすることで、アンチ・ドーピングの問題がより身近に捉えられるよう工夫している。今回のアンケート結果でも、前回の報告同様に授業への理解度が高かったことから、今後も履修学生に合わせたさまざまな視点からアンチ・ドーピングについて考える機会を設けていく必要があると考えられた。

授業後のドーピングのイメージについての回答から、授業を通してドーピングはやってはいけないことで、体にも悪影響があり、身近なものから禁止物質を摂取してしまうことがあるため、選手だけでなく周りの指導者やサポートスタッフも注意をする必要があるということを理解していることが推察された。同様に「ドーピング検査」のイメージについての回答からも、授業前では尿検査、血液検査といった「検査内容」についての回答が多かったが、授業後では厳密に、細かいルールの中で検査を実施しているといった「検査実施のイメージ」や「ドーピング検査の目的・意味」についての回答が多くなっていることから、ドーピング検査は大変で厳しい検査ではあるが、選手自身を守るための検査であり、選手の潔白を証明する検査であ

ることを理解していることが推察された。しかし、「ドーピング」や「ドーピング検査」へのイメージは、2年時に調査すると1年時の回答とほぼ同じ結果を示し、1年授業後に回答が増えた項目も回答数が減少していた。このことから、授業で理解した知識の定着が不十分であることが示され、今後は正しい知識を持ち続けていくためにも、継続的にアンチ・ドーピング教育を続けていくことが必要であると考えられた。また、「ドーピング」や「ドーピング検査」についての誤解や言葉の意味を混同している回答もいくつか見られた。これは前回の報告でも同様の結果が示されており、授業においては注意して説明をした部分でもあったが、説明がまだ不十分であったと推察された。今後はこれまで以上に言葉の意味・違いを正確に理解させた上でアンチ・ドーピング教育を進める必要があるとも考えられた。

本学学生は、将来選手として、指導者として、サポートスタッフとして活躍することを目指しており、常に情報が更新されていくアンチ・ドーピング教育を受けることは非常に重要なことである。今後は、学生がアンチ・ドーピングについて正しい理解をするだけでなく、その知識を定着させていけるようなアンチ・ドーピング教育について検討・実践を行っていくことが課題になると考えられた。

【引用・参考文献】

- 1) 赤間高雄編 (2014) 『スポーツ医学【内科】』化学同人
- 2) 公益社団法人日本体育協会 (2015) 『公認スポーツ指導者養成テキスト』
- 3) 公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構 (2015) 『アンチ・ドーピング研修会資料 (2015.12 改訂版)』
- 4) 高橋琴美・田本育代：本学におけるアンチ・ドーピング教育について、武蔵丘短期大学紀要 25 (1)、pp31-37、2017
- 5) 公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構 (2019) 『FAIR PRIDE ガイド-アンチ・ドーピングの基礎知識-』